



アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身の kiku さんがつづるふるさとエッセイ

— あいなん音故地新 —

変化の芽

戦争が終わらない。頭の上に爆弾が落ちてこなくても、私たちの生活にじわじわと影響を与えて、ゆっくりと首を締められていくような感覚。個人事業主の友人は開店休業状態やし、ある人はどんどん手に入らないものが増えたり、値上げがはじまったりと、コロナ前を彷彿させるって言う。

『無関心は最大の罪』、バーナード・ショーの言葉が浮かんだ。『無知は罪』、ソクラテスの言葉が胸に刺さる。「見てみぬフリをして、自分には関係ないと切り離していた罪」が、「知ろうとも、考えようともしてこなかったことへの罪」が、今の世界を作つとる。戦争だけじゃない。国も町も地域もそう。知ること、知ろうとすることが、その地域を、町を、国を、世界を変える一歩になる。

慣れ親しんできたことやから、今までもずっとこうしてきたから…その習慣に「変化の芽は」踏みつがされやすい。変化なくして成長はなし。気づかんままにその芽を踏んでしまわんように。立ち止まって考える時間が、一段と必要なときが来たような気がするよ。
(テノヒラkiku)



御荘文化センター図書室より

“5月の新着図書ピックアップ”の紹介

【絵本】

『バスが来ましたよ』

松本 春野(絵)・由美村 嬉々(文)／アリス館(発行)

病気で全盲となった山崎さん。白杖を持ってのバス通勤は不安でいっぱいでした。そこに「バスが来ましたよ」とかわいい声。小学生のさきちゃんが声をかけてくれたのです。この声かけは、さきちゃんが卒業しても他の子たちに引き継がれました。障がいがあっても仕事をする。そして周りが力を添える。作り話ではありません。本当のお話。



【海外小説】

『ある一生』

ローベルト・ゼーターラー(著)／新潮社(発行)

幼くして母を亡くしたエッガー。引き取られた農場での折檻と過酷な労働、一瞬で妻を奪った自然の脅威、危険と背中合わせのロープウェイ建設と保全、8年にわたる捕虜生活など、災難は多くあったが、彼はそれを越えて生きた。亡くした妻を懐かしみ、黙々と働く。働くということがこれほど端正なものであるとは。心揺さぶる、普通の男のある一生。



御荘文化センター図書室では、毎月「図書室だより」を発行しています。ピックアップ図書以外の新着図書情報やそのほか新しい情報を皆さまに発信しています。町のホームページにも掲載していますので、ぜひご覧ください。



愛南町
ホーム
ページ